

2026年度 第1回豊岡市地方創生戦略会議 会議録（要旨）

- 開催日時 2026年8月21日（金）午前10時～正午
- 開催場所 豊岡市役所本庁舎 庁議室
- 出席委員 門間座長、中嶋副座長、小田垣委員、倉田委員、倉橋委員、富樫委員、徳網委員、野崎委員、二方委員
- 欠席委員 島崎委員
- 傍聴者 2名

1 開会

2 新任委員への委嘱書交付

芸術文化観光専門職大学 准教授 富樫 佳織 氏

3 門間座長（市長）あいさつ

座長 本日は皆さんご多用のところ豊岡市地方創生戦略会議にご出席いただき、誠にありがとうございます。また、本会議の委員にご就任いただきました富樫委員には、芸術文化観光専門職大学と地域との連携、そして学生や若者の地域参加など、幅広い視点から率直なご意見を頂けると考えていますので、どうぞよろしくお願い致します。

さて、第3期豊岡市地方創生総合戦略ではありますが、今年度から実行段階に入りました。これからは戦略に掲げた方向性のもとで事業を実施し、検証し、そして改善をしながら、着実に成果へ繋げていくことが必要だと思っています。そこで本日は、第2期の戦略の実績や人口動態を踏まえて皆さんにご議論いただきますが、これまでの取り組みや既存の制度、組織の枠組みにとらわれることなく、今後新たに実施すべき取り組みや既存事業の改善方法、分野や組織を超えた連携のあり方など、皆さんのお知恵を拝借して具体的なお提案を頂ければと思っています。本日頂くご意見やご提案はこの会議の場だけで終わらせるものではなく、今後の事業改善、そして次年度以降の取り組みの検討にしっかりと繋げていきたいと思っています。限られた時間ではありますが、活発で実りある議論をよろしくお願い致します。

4 報告

第2期豊岡市地方創生総合戦略の実績について

<事務局より、資料2に基づき第2期戦略の各手段のKPIの実績について説明>

座長 ただいまの事務局の説明及び資料の数値や事実関係について、この場で確認しておきたいことがありましたらご発言いただいて結構ですが、いかがでしょうか。（発言する者なし）またこの後の発言の機会でも触れていただければと思います。

それでは続いて中嶋副座長から、人口動態から見た第2期戦略の到達点と課題、そして第3期戦略推進に向けた視点について情報提供いただきます。

5 情報提供

人口動態から見た第2期戦略の到達点と課題、第3期戦略推進に向けた視点について

副座長 最初に資料3の10ページを見ていただきたいのですが、まずスタート地点としてはもちろん人口減少対策が根本にあるわけなので、その人口減少のメカニズム、何をもって人口が減っているのかというその根っこ部分がわかっていなければならないので、その確認からスタートしたいと思います。2014年に民間の有識者会議である日本創成会議が、それから2024年にはそのアップデート版である人口戦略会議が全国すべての自治体の人口減少の予測を立てたのですが、その中で特に注目されたのが、20歳から39歳の女性が30年間でどれくらい減るのか、増えるのかということです。50%以上減る、半減以上してしまうところを便宜上「消滅可能都市」と定義していて、豊岡市の場合は2020年から2050年までに-49.9%、ちょうど半分くらい減少するだろうとされました。消滅可能都市の定義が50%以上ですので、本当に首の皮1枚のところでは消滅可能認定は逃れているんですが、0.1%にそんな大した意味はないわけで、それくらい減るということに変わりはないということです。文脈を置くために、朝来市・養父市・香美町・新温泉町と但馬の他の自治体も並べていますけれども、-50%台から-70%台ということで、新温泉町などは30年間で若い女性が71.8%減ってしまうということになっています。それから、その内訳として隣の【B】に書いてある-18.3%というのが自然減のみを要因とした推計ということで、要するに女の赤ちゃんが生まれる数が減ってくることによって、その自治体で20歳から39歳の女性がどれくらい減るのかという数値を示しています。その隣の【C】の-31.6%というのは社会減、転出による豊岡市からの若い女性の減少ということで、この割合を見ますと、-49.9%のうちの約6割が社会減によって、要するにほかのまちに転出してしまうことによって女性が減少していき、残り4割が自然減、生まれてくる女の赤ちゃんが減っていくがゆえにということになっているわけです。

ということは、より大きな要因としては女性の転出超過による社会減が根幹にあるというところが、豊岡だけに限りませんけれども、豊岡のような地方の自治体の人口減少の根幹にある問題だと。その原因を受けると、当然ながら対策の方向性として出てくるのは、スライドの2ページにあるように、どうすれば若年女性がそこへとどまり、あるいは帰ってきて、暮らし働いて家族を形成して、子どもを産み育て、そしてそれ以降の自分の人生も暮らしていくのかというところで選ばれる必要が出てくるわけで、それはどうやったら実現するんだろうかと。現に今、選ばれていないがゆえに流出が大きいわけなので、選ばれていない理由を特定した上でそこで対策を講じて、徐々に女性たちが選んでくれてとどまってくれるようにしなければならないわけです。黄色でハイライトされている部分ですが、若年女性の社会減を縮小し、そしてその方たちがやがて結婚適齢期、出産適

齢期と入ってきてくれることによって、家族の数が増え、子どもの数が回復し、自然減の回復へ繋がっていくというロジックを根本に考えていまして、その周辺に戦略が立てられてきたというのが第1期・第2期での基本的な考えになっていたわけです。

その第1期・第2期で何がどう達成できたのかというと、最初の女性に選ばれるということと、そしてそれが女性の社会減の縮小に繋がってきたということです。もちろん、流出が止まったなどということではなくて、やはり依然として大都市・大企業を中心とした日本経済全体の力というのは非常に強いのですので、大きなまちに向かって流出が続いてはいるんですが、以前のようなスピード感や規模感で、あるいは悪化のペースでの推移ということにはなっていませんので、一定程度の歯止めがかかっているということは人口動態の数値からも確認できるところです。下に箇条書きで書いていますけれども、大学の設置、観光・演劇、地域おこし協力隊、ジェンダー、働きやすい職場等の取組み、こういったところを女性に選ばれるまちとしてねらってやってきたわけですが、一方で、別に観光とか演劇の分野が女性に人気があるから大学を設置したわけではなくて、ある種その副産物として、開学して学生がそろってみたら大半は女性だったわけですね。正確に何割かは忘れましたが、多分6、7割くらいは女性の学生だったように記憶しています。そしてそういう活動を見て地域おこし協力隊の応募者がまた増えてきて、その分野もまた女性の方が非常に多くてということで、今、若い女性はUターンやJターン系よりも、どちらかというとIターン系で若い女性がかつてないほど増えてきている状況にあるということです。

それから、ここには書いていなくて後で出てくるポイントなんですけど、若い外国人の労働者の受入れも、過去10年ほどですごく盛んになってきたところです。この受け入れている若者たち、ほとんどが20代前半に集中しているんですけども、男女の内訳でいうとかつては1:2くらいの割合で女性が多かったんですが、最近は男女がほぼ同じような人数になってきました。先ほどのようなIターン系の若い女性を増やしたりとか、それから若い外国人の女性の労働者を増やしたりといったところが、若者の移動のところでの社会減の数値を相当改善している様子が見られるというところは、直近の足元のところでは悪くない結果だろうと思います。

ただ、残されている課題部分のところですが、そういったことが婚姻数の増加や出生数の増加に繋がってこなければ、この戦略としては片方だけの達成に終わってしまうんですね。若い人たちの移動の多くは20代前半に集中しているんですが、今、大体初婚年齢は男女平均で30歳くらいになっていて、そして1人目の子どもを産むのが30代の頭あたりですので、豊岡に移動してきてから家族形成して出産するのは、約10年後になっているわけです。ですので、この間に豊岡へ定着し、キャリアも作り、そして家族形成から出産へというふうに繋がってこなければいけないということになるわけです。2015年から第1期がスタートしてそのあと第2期ということで、5年ずつくらいでやってきたんですけども、取組みを

初めてすぐに社会減が改善したわけではなくて、特に観光・芸術とか大学の設置云々というのはコロナ期の2020年以降ですので、ここで若い女性が増えたからといって、すぐに結婚・出産とはならないわけですね。約10年後の2020年代の後半くらいから社会減の縮小の影響が自然減のほうにも出たらいいなというところで、どうやったらそこに結びつけられるだろうかというところが大きな課題になってくるのではないかと思います。

皆さんの多くはコロナ禍で出生数が激減したということはもちろんご存じのはずで、もうすぐ300人を切るのではないかというところまで来ていますので、2000年代に1000人くらいあったところからすると、今は3分の1以下の出生数まで来てしまっているわけなんですよ。そこをすごく皆さん気にされていると思うんですけども、私がむしろ注目しているのは、未婚で生涯を終えるという方々が激増しつつあるということで、そこを非常に懸念しているところです。豊岡に定着して20代後半から30代前半となってきたときに、未婚の方がぐっと増えるような状況や雰囲気といいますか、そういったカルチャーなり価値観がこういった地方のまちでも定着してしまうようなことになると、後半の婚姻や出産というところに繋がってこないだろうということです。

もう1つのポイントとして後半で書いているのが、外国人の受入れのところですよ。9ページの棒グラフを見ていただきたいのですが、こちらは過去十数年の日本人／外国人、それから性別での社会増減の数値を表しているものです。下に伸びているピンク色のところが日本人の女性の社会減の数ですね。それから水色は日本人の男性の社会減による減少数で、最新の2025年を見ていただくと、日本人の女性が280人ほど転出超過、そして男性が300人ほどの転出超過ということで、日本人だけで見ると580人くらいの転出超過、社会減になっているわけですね。上に伸びているところは外国人の受入れの転入超過数です。黄色が外国人の女性、グレーが外国人の男性で合計100人ほどということです。先ほどの580人くらいの日本人の減少を、100人ほど若い外国人を多めに受け入れることによって部分的には相殺しているという構造になってきているわけです。こういったことが2016年あたりから徐々に始まってきて、コロナ禍で出入りができなくなった期間を除けば、少しずつ外国人の存在感が増してきているということを確認していただけだと思います。

それから、この日本人の動きのパターンなんですけれども、2018年から2019年あたりで一度日本人の流出が多くなって、コロナ禍でぐっと縮小しましたがけれども、2023年以降はまた流出が増えてきている、減少が拡大してきています。これはこの戦略会議が頑張っていないからだとかそういうことではなくて、外部的な要因です。要するに日本経済全体がそれくらい好景気であったと。そのことによって大都市や大企業での雇用熱が高まってくると、進学・就職でこのまちから出て行って帰ってこないという人たちが増えてしまうわけなんですよ。そういったシーソーのような関係にありまして、ここはちょっと悩ましいところなんですけれども、コロナ禍のように不景気に陥って都会ではあまり仕事がないとなると、流出

が減少していくという関係性になっているわけなんですね。日本全体での、それも大都市・大企業に対しての競争みたいになりますので、真向からこれに向き合ってもなかなかそこは難しいところなんですけれども、こういった好景気・不景気によってアップダウンはこれからもそこそこあるということは認識した上で、10年、20年と長い目で見ていって少しずつ傾向を変えていこうということです。例えば、先ほどの女性の社会減が落ち着いてきたのではないかということに関しては、2010年代のあたりを見ると明らかに6割から7割が日本人の女性の減少であったのが、最近では日本人の男性と日本人の女性の減少規模というのはもうほぼ一緒なんですね。ここが少しそろってきているというのは、先ほどの観光・芸術とか地域おこし協力隊とか、それから転入超過となっている外国人の女性などの関係でもって、男女の差はかつてほどではないという状況になってきています。

その上でなんですけれども、これも皆さんご存じかと思いますが、今後、技能実習制度や特定技能制度の改革が行われて、おそらく2027年から「育成就労制度」というものが始まります。これまでは建前上、国際協力のために日本に来て実習してもらって、帰国して途上国・新興国のために尽くして頑張ってもらって、そういう大義みたいなものでやってきたんですが、これからはもうそういう建前と本音の使い分けみたいなことはしません。日本に来て技能レベルを上げてもらって、そして日本にそのままとどまって協力してくれる、活躍してくれるということであれば、もうできるだけ日本にとどまって労働者として活躍してほしいということで、これまでのように3年とか5年でぐるぐると循環するだけの外国人労働者というような制度から、より長い期間、帰化まではしなくとも永住権を取ったりしながらそのまま日本に住むというような、そういうトレンドの制度に移行していくことになります。そうなりますと、日本人の社会減の課題みたいなところとクロスしてくるんですね。これまでであれば、豊岡市内の経営者の方々がどうしても日本人の若者で人手が足りないからということで、こういう人が欲しいといってマッチングした人たちを豊岡に連れてくるということができたわけなんです。これからは長く日本にいられるということと、おそらく日本の中でもどの地域で、どういう企業で仕事をするのかという自由度が与えられる外国人の数や割合も増えてくるはずです。ですので、一度豊岡へ来てくれたからといって、10年、15年とその先もずっと豊岡に住み続けて働き続けてくれるとは限らないわけなんです。豊岡の企業、豊岡のまちを外国人にも選んでもらえなければ、これまでのように循環してしまって、日本人と同様に婚姻と出生には結びついてきませんので、目先の社会減の改善や人手不足の改善にはなるけれども、長期的な自然減のところの改善には外国人が貢献してくれないということになるわけなんです。日本人であろうとなかろうと、若い人たちに選んでもらい、そして切れ目のない支援で家族形成にまで結びつけるような動きを実現していく必要があるということかなと思います。

それを踏まえまして、スライドの3ページをご覧いただきたいのですが、第3期では新たな視点ということで、「関係人口」というものにもう少し取り組んでみ

てはどうかという提案です。実は関係人口という言葉は、本市のこの戦略会議や関連する文書にちらほら出てきてはいて、先ほどの第2期戦略の実績の説明資料にも1か所だけあったように記憶しているんですけども、これまでは特に戦略上重要な言葉だとか概念、取組みとして位置付けてはこなかったものです。ご存じない方のために説明しますと、関係人口とは定住人口と交流人口の間にあるものでして、定住人口というのは豊岡市に住民登録して現に住んでいる方ですね。交流人口というのは観光に來たりお祭りに來たりと、その時々には訪問してくる方々で、その間にあるのが関係人口だと言われています。例えば、もともと豊岡の生まれだけれども今は市外に住んでいて、私のように専門家として時々來て協力するとか、あるいは実際に來られなくてもふるさと納税しようとかいうのもそうです。それから、芸術文化観光専門職大学ができましたし豊岡演劇祭なんかも始まりましたので、住んではないけれどもそういった関係でリピーターとして継続的に豊岡に來て、活動に協力してくれている方もいると思うんですね。

この関係人口には2つ重要な意味合いがあります。これまでは、地域のにぎわいとか活力にとっては、定住人口が一番わかりやすくシンプルだからということで、ずっと人口の数を追ってきたわけですね。幾分かの減少抑制をやりながらも、それでもやはり今は7万2000人ほどかと思うんですけども、今世紀の半ばくらいには3万人台というところまで落ちて、半減してしまうということはもう避けられないわけですね。7万人くらいで維持できるとか、ましてや増えてくるなんていう将来は非常に考えにくいのです。量だけでなく質ということで攻めと守りという話が出てくるわけなんですけれども、質的な部分、守りの部分をやっていく中で、本当に定住している人だけがこのまちのにぎわいや活力を生んでいるのかというと、実態はそうではないということはもうこの20年くらい言われてきたわけです。いろんな人たちが出たり入ったり継続的に外側から協力したりしながら、ひとつのまちはできている、機能しているんだと。ということで、関係人口というものを重要なものとしてとらえなくてはならないし、そして定住人口が増えなかったとしても、このまちのファンとしてまちに協力する人たち、準市民みたいな形で外側から協力してくれる人がたくさんいらっしゃれば、ある程度定住人口以上の活力やにぎわいというものは今後も維持できるだろう、という意味での重要性が1つ目です。もう1つは、スライドの3ページの3つ目で書いていますが、関係人口の中でも、幾分かは将来的に移住者・定住者になってくれる可能性を持っているということなんです。1990年代から2010年代くらいまで、こういった地方のまちというのは移住定住促進でもうありとあらゆることをやってきたんですけども、ほとんどの自治体は失敗しているんですね。ごく例外的な自治体が成功事例という形で地方創生のお手本だと言われているんですが、ほとんどのまちは失敗しているわけです。そういったところは何をやっていたかということ、移住定住をひたすら連呼していたんですよね。でも、移住定住する方の視点や立場から考えると、たまたま移住定住の広告やイベント案内を見たからといって、「このまちにしようか」なんていうことにはならないはずなんです。

何かしらの縁で接点を持った方がそこへ何回か行ってみたり少しずつ関与を深めたりする中で、「ここで暮らしてもいいかな」と思って移住定住に繋がってくると、これが論理的に考えて適切な流れではなかろうかと。この途中の流れをすっ飛ばして最後の「おいで、おいで」のところしかやってこなかったのも、なかなか結果が出てこなかったのではないかとということです。移住定住促進をこれからもやっていくにしても、その間の部分のところ、どういう人たちと接点をつくって、そして段階的に本市との関係性を深めていっていただくのか、ですね。移住定住という選択もあるかもしれないし、あるいは最後まで定住者にはならないかもしれないけれども、大きな応援団として外から協力してくれる人たちを1人また1人と増やしていく、このあたりの話が重要になってくるのではないかとということです。

3ページの下から例1、例2と書いているのは、関係人口を拡大していくための方策の事例ということで、まずは「ふるさと住民登録制度」ですね。これは丹波市が確かやっているはずなんですけれども、定住人口としての住民票を移すということとは別に、準市民になってもらうような形の登録制度をつくるんですが、準市民になればその市に来たときにこういうメリットがありますというような様々なインセンティブをつけたり、あるいは空き家を使ってもらったりというような話ですね。それから、もし関係人口で若者や女性をもう少しターゲットにしたいということであればということで、いろいろと書いています。若いうちからという意味では、島根のほうでは島留学といって、地元の高校が全国から高校生を募って、そして寮生活してというようなこともありますね。豊岡市も城崎温泉があり神鍋高原もあり竹野の海もありというまちですので、林間学校とか、4ページにも書いていますように観光とか自然など、様々な接点を見つけてそれを高めていくことはできると思います。確か今年度の市の文書の中に、「これまでやってきたことが点としては存在するけれども、線や面になってない」ということがあったかと思いますが、このあたりは関係人口の創出や拡大をやろうという方針や実際の施策・事業の中で、それをどのような体制でやるのか、どのようなプログラムやコンテンツとしてやるのかということを考えながら取り組んでいけば、おのずと繋がってくるだろうなというふうに考えています。

最後は、守りの部分を入れることになるのであれば、こういう話がおのずとこの戦略の中でも取り扱われてくるんだろうなと思うことを、箇条書きで入れています。この地方創生戦略会議の所管分野でなかったのここで話題に上がってこなかったというだけで、これまで別の会議体や所管している部署で、ここに列挙しているようなことはそれぞれ行われてきたものと理解しているんですけども、要するに、片や人口減少に抗う攻めの取組みをやりつつ、片やそれでも人口減少していく今後の本市のあり方というところなんです。どうしても徐々に退いていくとしても、やはり一定水準以下には下がり過ぎないように、ここはもう絶対に引けないんだと、こういう暮らしの水準とか満足度についてはこれより下げないんだというところを決めて、それを定期的に確認しながら維持していく方策とい

うのを戦略的に考えていかなければならないということになると思うんですよね。もう竹野のほうでは新しくバスのオンデマンドサービスが始まっていたりとか、いろいろとやっていたらいいんじゃないかと思いますので、改めて暮らしの質を維持する指標と取組みという部分について、1つの体系図として一度整理した上で、そして現状の把握と、どのあたりまで下がってきそうかという推計と、もしそれが自分たちの決めた目標値より下がってくるというような将来が見えてくるのであれば、そこはやはり戦略的に注力しなければいけないということになってきそうかと思います。長くなりましたが、以上です。

座長 ありがとうございます。多岐にわたることについて、一つひとつが非常に議論の深まるポイントを、導入部分でご説明いただいたと思います。ただいまの情報提供について、皆さんそれぞれが普段接している情報やこれまで培ってきた経験、キャリアの中で合致している部分であるとか、あるいはこの部分について知識を入れておきたいということがありましたら、質問や確認ということでご発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。（発言する者なし）この点についても、後ほどでも触れていただければ結構ですので、次に進めさせていただきます。

6 提案・意見交換

第3期豊岡市地方創生総合戦略に基づく今後の具体的な取組みについて

座長 先ほど中嶋副座長から根っこの部分をご説明いただきましたので、私からは豊岡市の現状について、改めて整理してお話しさせていただきます。

資料の4です。見たくもない情報ばかりですが、まず人が減っているというのは具体的にどんなトレンドなのかということと、何人になっているのかということ、これまでそれをどう下げ止まらせようとしていたのかというのがこのグラフです。2020年からですけれども、その時点で7万7000人。推計人口が青のラインで、皮肉ですが順調に右肩下がりで、2050年を見ていただくと5万人を切るんですけれども、推計人口の4万7000人に対して、目標人口は4万8000人です。たった1000人ですけれども、これを下げ止まらせるだけでも、とてつもない労力と成果の積み上げが必要だと思っています。それくらい今、人が減っているというトレンドでして、それを食い止めることがなかなか難しいということ、このグラフで皆さんと共有させていただきたい。地方創生というのはもう人口減少対策で、これをどうするのかという話です。

何でそうになっているのかということですが、生まれてくる子どもが減っているからということで、具体的には3ページのグラフです。2024年は355人だったのが2025年は307人で、近視眼的な話ですが、減っている中でもかなり加速しています。単純に計算すると、こんなもん放っておいたらあと6年でゼロですので、これもどうにかしないといけないわけですが、これはもう子どもの数が1人また1人と増えることの積み上げでしかこの加速は止められないと思っています。もちろん大きな戦略として掲げた上での取組みにしないといけないと思いますが、個人的にはもう本

当に目先でこれを何とかしたいと思っています。

次のスライドです。今までは何人減っているのかというボリュームの話でしたが、減っている中でも人口構成の割合が正三角形のピラミッドであれば、それなりにいろんな可能性というのもまた探っていけるんですが、残念ながら人口構成の質ということについても、少子高齢化が進んでいくというのがこのグラフです。緑色が19歳以下の人口の割合で、どんどん右肩下がり。そして濃い青が65歳以上の割合で、こちらは右肩上がりでワニの口のように19歳以下とは広がっていくであろうという推測です。そして、真ん中のボリュームゾーンは20歳から64歳の生産年齢人口で、経済や社会の担い手として非常に重要な部分であるんですが、こちらについても減少傾向で、そしてこれからはその加速も見受けられるという、こういった事実や今後の推計があるということです。

次に5ページをご覧ください。現状がこうなんだという中で、悠長に年度を待って施策を展開するということも言っていないので、常にウォッチしています。先ほどご説明した生まれてくる子どもの人数はどうなんだという、今年2026年の上半期が終わった時点で164名の方に出生届を出していただいているということで、豊岡市で出していただいたからといってそのまま豊岡の人口に繋がるかというちょっとした誤差はあるんですが、上半期は164名とさせていただいて結構です。これに掛ける2をすると320人を超えますので、単純にそんなことにはならないんですが、下げ止まらせることになってほしいなと思っています。

次のスライドは、2025年までの出生数の推移です。豊岡市は面積が広くて東京23区と同じくらいあって、旧1市5町それぞれに特質がありますので、各地域の出生数がどうなっているのかというのを示したのがこの棒グラフです。一番上のオレンジが2014年、真ん中の青が2019年、一番下の緑が2025年ですが、半減している感じを見ていただけたと思います。さらに2025年を旧町ごとに見てみると、城崎は7人、竹野は9人、但東は5人ということです。但東には中学校が1校ありますが、1学年1クラス5名、そしてそれはもう将来の推計ではなく、2025年に生まれた子どもの数ということです。目を背けたくなる数字なんですがこういう状況ですので、これは私のほうから、市政懇談会で360弱の区長さんには全部共有させていただいています。今のトレンド、内訳ということで非常に厳しい空気になるんですけれども、目を背けるわけにはいかない数字でありますし、繰り返しになりますが根っこの部分ということで共有させていただきたいと思います。

最後です。先ほど中嶋副座長からもありましたが、片方だけというか、女性に選ばれるとか社会減の抑制だけではダメであって、婚姻数と出生率の増加に繋がっていかねばならないということです。もちろん、すでに豊岡市として今やっていることがありまして、その一端として結婚支援事業を行っています。まずは7ページのグラフですが、真ん中の青い折れ線が市内の婚姻数です。何組結婚しているかというのはあまりイメージがなかったかもしれませんが、2025年を見ていただくと年間で193組です。緑の折れ線は先ほどから説明している出生数で、赤い棒グラフは豊岡市が行っている結婚支援事業によって成婚まで結びついたカップ

プル数です。これを多いと見るか少ないと見るかはそれぞれあるわけですが、実際にこのような成果として挙がっているという数字です。小さいようですが、もしこれがなければ193組の中の14組がマイナスになっていますので、ちょっと視野が狭い話ですが、こういったこともしっかりと取り組んでいますし、もっと増やしていかなければならないですので、そのために皆さんのお知恵もまたお貸しいただきたいということで、一部ですけれどもデータも含めてお示しました。私の説明は以上です。

それでは、第3期戦略に基づく今後の取組みについての具体的なお提案やご意見を、委員各位に伺いたいと思います。第2期の取組みの延長に限定せず、地域の課題などに対してこれから何を実施すべきかという観点で、皆さんのご意見を頂きたいと思っていますが、特に次の5つの観点からお願いできればと思っています。まず1つ目は、今後新しく実施すべき具体的な取組みということについて、皆さんに触れていただきたいというのが1点。2点目は、既存の事業の改善や組み替え、統合、見直しといったことについて、身近でやっていることを聞いたことがあるという方もいらっしゃると思いますので、そういったことも遠慮なく触れていただきたいというのが2つ目。3つ目は、分野、組織、大学、企業、地域などを越えた連携方法について、組織の連携という観点でのご意見も伺えればと思います。4点目は、取組みの対象者と必要な人に届ける方法です。やっていることはやっていますが、知られていなければ存在しないのと同じですし、届いていなければ使われません。そういった観点も含めて、取組みの対象者や必要な人に届ける方法について、皆さんの知見からご発言いただければと思います。そして5つ目は、成果を確認するための指標や把握の方法について、そもそもこの指標はどうなんだとか、把握する方法としてももう少し改善の余地があるんじゃないか、こんな視点で指標を検討してみてもどうかというようなことも、皆さんからご意見を頂ければと思っています。

それではまず、A委員からお願いしたいと思います。

A委員

今、示していただいた5つのポイントでお話したいんですが、その前提となっているものの話で、質というところがあったと思うんですね。この質というのが、私の専門分野でもあるIT、最近ですとやはりAIの浸透によって随分求められているものが変わったなという印象があるんですね。ITが進み始めた頃は、世界最高の給料を稼ぐ金融トレーダーたちがどんどん職を失いました。そしてAIが出てきて、その世界最高水準というところの人たちのターゲットが哲学者に変わってきていて、もっと面白い話が、高い給料をもらえる職業として、編集者と言われるような人たちの給料がどんどん上がってきているというニュースが出ています。これは何を意味しているかというと、今まで価値が高いと思われていたものがガラッと変わってきているということだと、私は理解しているんですね。先ほどあったように、経済の動向や景気の動向に合わせて豊岡の人口が大きく減ったり、逆に下げ止まったりというふうにして持続していくものであることは、当然、仕方がない。そうだとすると、経済がどんなふうに向かっているの

かというところの認識で言うと、AIというものの影響でどちらになるかはわからないんですけども、さらに大きく変わっていきそうだなというふうに感じています。特に東京で仕事をしていると感じるのは、何か意思決定をするわけではなく、何かユニークなものがつくれるわけでもないという中間にいる人たち、一番数が多いとされる層の仕事がどんどん置き換わっていています。これは当然ですが、ボリュームがあるから置き換えることによって利益が増える、コストが減らせるからなんですね。であるならば、こういった人たちがどこに行くんだろうか、何を求められるんだろうかという視点でやっていることとして、先ほど中嶋副座長のご指摘にもあったように島に留学しに行ったり、工学を学ぶのではなく経営を学ぶための高専に子どもを行かせてみたり、都会の保育園ではなくて隣に牧場があるような保育園に、家族旅行も兼ねて夏休みに子どもたちを連れて行ったりというような、そういった地域でしかできないような取組みが各地でされていて、それが優良事案として報告されているというのが現状だというふうに認識しています。

今後取り組むべきことという話で言うと、関係人口というキーワードの中にあつたように、豊岡はかなりユニークなことをしていると思うので、そこをもっとアピールしていくということが大事なのではないかと思っています。第1期・第2期で求められたことというのは、都会の劣化版をやりたいみたいな話だったんだと思うんですね。それはマス（大衆）の人達に向けられたテンプレート的な、いわゆるテーマパークみたいなもの、昔で言うと、大型バスに乗って城崎温泉に行きましょみたいなものだったと思うんですが、そうではなくて、やはり個人の多様なニーズにどれだけ応えられるかというところにすでに取り組まれているので、これをもっとやっていくという方向性でいいのではないかと思っています。その文脈で言うと、これまでそういうふうにしてきたものの中には、良い種とか良い土壌というものがすでにあるのではないかと私は感じていて、実際に創業の件数も33件と、目標を超過しているということも起こっているわけなので、そういった芽が出始めたものをどのように支援してくかという発想に切り替えていくことが必要かなと。外から大きな工場を誘致してそこで人に働いてもらうのではなくて、中から生まれてきているものをどう支えていくかという、既存事業のほうに組み替えていく部分があってもいいのではないかと思っています。

最後にあと2つあるんですが、1つは、やはり良い取組みをしても伝わらなければ意味がないという話です。これはもう伝え方の問題なので、例えばあらゆる行政文書を但馬弁で説明してくれるようなAIを用意するとか、来庁いただいた人たちを「おっちゃん」とか「おばちゃん」というふうに親しみを込めて呼ぶとか、何か今までらしくない市役所のあり方みたいところで、ヒューマンタッチと言われるような人との繋がりとか、人間らしきみたいなのをもっと感じさせるというのも、市長の決断ですぐできることなのではないかと思うので、何かそういった関わりの持たせ方みたいなのところを変えるのがいいのかなというのは思いました。

最後に、評価しやすいとかしにくいという話でK P Iというところが出てくると思うんですけど、このK P Iに関しては、今までは質というよりどちらかというとなんか決めている量とか回数というような話がすごく多かったと思うんですよ。なので、そこをもう少し、回数なんだけれども質も拾えるというようなものにしていくというところで、例えば豊岡市のサイトの閲覧数というわかりやすい数字が出ていますが、さらにそれをもう少し深くして、リピーター率とか、そこから入ってきた人たちが豊岡関連のコミュニティにも入っていったのかとか、そういった継続数みたいなものを見ていくのがいいのではないかと思います。あと、これは旅館などではきっとやられていると思うんですけども、観光客の利用者数とか何泊したかというワンショットの話ではなくて、どれくらいの期間をあけて次にまた来てくれたのかという再来訪までの間隔であるとか、一生涯にわたってどれくらい来てくれるのかというL T V（顧客生涯価値）というような、何回来てもらえたかというふうに目標を少し変えていくと、お客様との接点の持ち方が変わると思うんですよ。来てもらって、言葉は良くないですが「何でもぼったくったらええやん」という話ではなくて、もう1回来てもらうためには何をしていかなければならないのかということと、あとは、もう1回来てもらったときに同じようなサービスができるように、自分のところの従業員や自分たちのファシリティというものをどのように継続させなければいけないのか、つまり何が求められているものなのかといったあたりの、質的なものを評価するような指標を用意できるといいのではないかなと思って聞いていました。

B 委員

私がこの会議に來させていただいた後、知人から、話がなかなか難しいということと、具体的なことをもう少し教えてほしいということ言われたのですが、やはり住んでいる者として、豊岡がこの先どうなっていくのかということに不安を抱えている方は、やはり少なからずいらっしゃるんだと思います。ですので、例えばインフラなどの暮らしの質が今後どうなるかということや、ある程度具体的に示していただくようなことがこの先ぜひあってほしいなと思っています。私は今、学校の校長をしていますが、インフラのことですごくありがたいなと思っていることがあって、北近畿豊岡自動車道ができてから随分と移動が楽になりましたし、それを使ってかなり遠くから通勤している職員もいます。そういったメリットも含めて、この先の生活がどうなるのかということや、今どういったことが問題になっていて、それをどう改善できるのかというようなことを知らせていただけることがあればいいのかなと思っています。

それから2つ目は、これはかなり私にとっては現実的な話なんですけれども、私自身、やはり今後の教育についてはものすごく不安があります。子どもの数が減っていくことによって、どういった教育が提供できるのかということや、何をしないといけないのかというところは本当に悩むところで、最近も近くの高校の先生と、これからは学校も地域にどう貢献できるかということを考えなければならぬのではないかなという話をしたところです。そういったことを考えますと、ただ卒業して大学や企業へということではなくて、前回も言ったんですけども、

こういった生き方をしないといけないのかということ、やはり学校としても伝えることが必要になってくると思います。ただ、やはりそれは学校だけではできないところもあって、そこは地域の力もお借りしたいなというふうに思います。今年になってから、仕事ということを学ぶにあたって外部の方に来ていただく機会があって、私自身も地域の方のお話を直接聞くことができ非常に良い機会だったんですけれども、先ほど申し上げたように、仕事だけでなくこういった生き方や生活をしていくのがよいのか、そのためには地域の方にロールモデルとして学校に来ていただく機会が増えるといいのかなと思っています。そして地域だけでなく、小中高の縦の繋がりですとか、高校同士の横の繋がり、地域や企業の方との連携もこれまで以上にしていく必要があるのではないかとすごく感じました。その中で、ふるさと教育ということでもないんですけれども、地域についての理解を深めたり、地域の方とコミュニケーションをとったりすることによって、地域への愛着を持ってもらうということも考えていく必要があるなど、私の立場としては思っています。

3つ目は、先ほどから関係人口という話が出てきているんですけれども、これまでどおりのことをやっていたのでは変わることがなかなか難しいと思いますので、やはり関係人口ということを考えていくことがこれからは大事なかなというのすごく思いました。学校ということでは全国募集の話がありましたけれども、実際に私も前任校でそれをやっていました。全国展開をしているプラットフォームに加入して説明会等も参加したんですけれども、今、全国で200校くらいの高校が全国募集をしていますので、そういった先行事例もあります。また、ワーキングホリデーやリモートワークをやっていらっしゃる方もあると思いますので、そういった2拠点というところも大いに納得できる場所がありましたし、やはり柔軟に考えていく必要があるのかなというふうに思いました。柔軟にとは言っても具体的にはなかなか難しいんですけれども、ひとまず学校に関してというところでは、分野を2つか3つ決めて検討していただくといいのかなと思いました。

C委員

私は、今回の会議の前に自分なりに豊岡市で行われている施策を一通り見直してみまして、その中で企業さんや個人の方にもどんな状況かというのちょっと聞いてみたんです。そうすると、今、豊岡市の子育て支援について非常に良くなっているという声をよく聞きまして、これは全国的にも充実しつつあるので、ぜひ豊岡市も引き続き頑張りたいという声をよく聞きました。あと、企業向け補助金ですとか生産性向上にかかわること、採用支援等も、県内のほかの自治体でもよく見るんですけれども、その中でも非常に充実しているなど思ひまして、その点に関しても特に申し分なく、ありがたく利用させてもらっているという声がありました。先ほど結婚支援事業についても非常に実績が出ているということがありましたが、中嶋副座長からもあったように、すごく頑張っているんだけれどもどうしようもないという部分もかなり多いのかなと思いますが、ただ、それはどうしようもないのでということではなく、非常に頑張っている中で豊岡市をもっと良くしていこうということで、有意義な取組みになっていけば

なと思っています。

個人的に今の施策の中で非常に良いなと思うのは、前回も言ったんですけどもワークイノベーション推進会議という取組みがあります。中身を見ると、実は予算が600万程度しかない事業なんですけど、非常に今後の効果があるのではないかなと思っています。Will Lab代表の小安さんがコーディネーターだと思うんですけども、女性中心の子育てで夫はサポートという考え方から、今後は「共育て」ということで、男性も女性も主体的にやっていきたいと思いますという考えに皆さん共感されているようです。ここでは何か女性中心に書いてあるんですが、女性だけではなくやはり男性も含めたところで、豊岡市の企業は日本一働きやすい職場なんだというコンセプトをどんどん打ち出していただけたらなと思っています。

もう1つ良い制度だと思うのは創業支援で、専門員の方を配置されていて非常に相談しやすい状況になっています。それと同じように、例えば働きやすい職場にするにはどうすればいいかというのを相談できるような方を配置するとか、あとは「あんしんカンパニー」取得の費用が結構かかるので、それに対する優遇もしていただきたいというような声を聞いています。あと、ジェンダーギャップについて豊岡市がよくメディアに取り上げられるんですけども、ほかの地域でもジェンダーギャップについてはすごく取り上げられてきていますので、他地域との調査・交流ということも進めていただきたいという意見を聞いています。ですので、このあたりの働きやすい職場ですとかジェンダーギャップの解消というのをぜひ発信していただいて、外から来てもらうということを進めていくといいのではないかなと思っています。

それから、先ほどから関係人口の話が中嶋副座長や委員の方からも出ていますが、外から来るというのは豊岡市も結構あると思うんですけども、市内で交流するという機会が、特に企業間や異業種間ではあまりないと感じています。連携という話でいうと、専門職大学の授業に職員を参加させるというのを我々も今年から実験的にしているんですが、例えば企業の皆さんのリーダーとかマネージャー候補の育成のためのプログラムを大学と一緒に作っていただけると、女性や外国人も含めたところのリーダー・マネージャー候補を増やしていくような場になるかなと思います。学習以外でも、そういった内々の交流を深めるような場をつくっていただけたらということで、意見として言わせていただきました。

D委員

初めての参加でこのような意見を言うことを皆さん驚かれると思いますが、私を感じたことを忌憚なく申し上げたいと思います。それは、多様な視点や異なる視点から意見を申し上げるために、私がこの委員に任命されていると考えているからです。不快に思われる方もいると思いますが、私が豊岡市の取組みについて批判的に感じた点をあえて申し上げます。私は、この会議の方向性は良いと思いますし、皆さんが実施してきた戦略も真面目に前向きに取り組んできたことを理解しており、否定は一切していません。一方で、私はこの会議が始まってから説明を伺ってきて、非常に精神的な苦しさを感じています。それはなぜかという、第1期・第2期の戦略については、非常に強いホモソーシャルの概念によって構

築されているというふうに理解したからです。皆さんご存じだと思いますが、ホモソーシャルというのは社会学の専門用語で、男性同士の結びつき、男性同士の絆をもとにして、男性のみが公的な社会を担う性別だとする認識のことです。第1期・第2期の戦略のポイントは大きく2点ありましたが、この2点が現代人の求めている幸せな生き方を尊重していないと私は理解しました。1つは、若い女性に選ばれるまちのゴールとして、婚姻数の増加、出生数の増加となっていますが、これは女性のことを子どもを産む性と定義し、強制し、性別による役割を求める差別を文章化しているものだと思います。実際、私自身結婚していませんが、子どももいないのですが、私はやはり研究や仕事をして自分の人生を送ってみたいという選択のもとに、あえて婚姻や出産を選んではいませんし、そういった女性は今増えています。それにもかかわらず、女性に選ばれるということの目的として子どもを産むことをゴールに設定していること自体が、現在の女性であったり多様性であったりを尊重する社会とは、文脈的に反対方向に行っていると感じました。もう1点は、人口減少分を、外国人を増やすことで補うというゴールです。これは国籍によって労働者という役割を定義してさらに強制しており、国籍による役割を求める差別を文章化しているというふうに私は理解しました。

また、第1期・第2期の戦略のポイントでは、住民一人ひとりの多様な考えや幸福については一切言及されていないと感じました。これは政治行政ですので、一人ひとりに言及するというのは限界があると思いますが、やはり政治行政というのは、一人ひとりの幸福というものを考えた上で全体の政をしていくものなのに、男性が公的な立場・役割を担うという観点から、行政側が女性や外国人に対して差別的な役割を強制しているというふうに感じたことは、非常に残念でなりません。女性が豊岡から流出しているのは、私はこうした社会に根付いているホモソーシャルの文化に対する息苦しさがあるからではないかと感じています。実際、私は4月に芸術文化観光専門職大学に着任してわずか3か月ですが、複数の女性の学生から、地域の行事に良かれと思って地域貢献のために参加したんだけど、その時に地域の方々から「地元の男性を紹介するから、結婚して豊岡に住んで子どもを早いうちに産んでくれ」ということを面と向かって言われ、強い恐怖を感じた、非常に恐怖感が強いので地元の行事にも参加できず、どうしたらいいかわからない、という相談を受けています。そういったことで、実は学生の側も地域に溶け込みたい、貢献したいと思っているんだけど、自分の望む人生を否定されている、強い恐怖感を抱いているという意見があることを、ここでご報告しておきたいと思います。

東京や大阪では女性の人口は増えています。これは人口比などでの相関関係でしか申し上げられませんが、東京は未婚女性の比率が全国トップクラスです。つまり、女性でも結婚しない、子どもを持たないことに幸せを感じる人が増えてきていますし、男性でも同じように感じる人は増えてきていて、それが日本全体の婚姻率の低下に繋がっているというのは推定できると思います。東京や大阪といった都市部は、働く場所があるという点がまず大きいですが、やはりこの一人ひ

とりの多様性や、一人ひとりの人間が実現したい幸せというものを尊重している社会に変化しているために人を集めている、というふうに言えると思います。LGBTQXといった多様性の尊重が求められる社会で、豊岡市は現在においても非常に昭和的でホモソーシャルな考え方を変えられていないということを、この会議で私は感じました。

批判するだけではお役目として大変申し訳ないと思うので、私が提言できそうなことを2つ申し上げます。1つは、社会学者でジェンダーの研究をしている専門の方に知見を求めまして、やはりこのホモソーシャルという考えがロックされてしまって外せていない現状について、理解や改善策を検討して、その上で戦略を検討していただけたらとても良いと思いました。もう1つは私見ですが、私は芸術文化観光専門職大の教員の立場で、芸術文化ということを土壌にした研究分野にいます。私の研究領域である経営学は、1990年と2000年以降で大きく概念が変わりました。2000年までの、製造業を基盤とした企業や自治体が大きく成長して人口を増やしてお金を稼いでいくという文脈は、インターネットの登場によってもうその理論の効果はなくなっています。その代わり、一人ひとりの優秀な人を組織や地域に集めてイノベーションを起こしていくということが大事になってきていまして、この考え方で経営学において結構注目されたものとして、2009年頃に日本でも書籍が出版された、リチャード・フロリダの「クリエイティブ・クラスの時代」「クリエイティブ都市論」という概念があります。これは、クリエイティブな力、つまり多様性であったり新しいテクノロジーを使えたり、そういった今の時代にフィットした能力を持っている人が、住み心地が良いと思うまちに住むことによって、そうした能力を持った人のクラスターができ上がっていく。そして、用意された仕事や用意された住環境ではなく、そういった新しいイノベーションに魅力を感じて外から移住者が増えていく、という現象をデータなどで説明した研究成果です。そこではサンフランシスコの事例を例にとり、やはりLGBTに寛容であるとか、自分らしさというものを保ったままコミュニティに参加できる文化がある街が、2000年以降は新しい仕事や新しいイノベーションを起して発展し、一方で金融の街だったニューヨークが衰退していったというようなことを論じています。ですので、やはり今後はそういった視点も、魅力ある地域やそして地域を存続させていくためには大事なのかなと感じました。初めての参加で僭越な意見を申し上げて申し訳ありませんが、おそらくこういう意見を言う方も少ないと思いましたので、あえて申し上げさせていただきました。

E 委員

今後実施すべき具体的な内容ですが、やはり若者世代や子育て世代の方々が豊岡に住み続ける理由というのが必要ではないかと思います。例えば、住宅の新築とかリノベーションの費用に対する支援とか子育て支援、医療や教育といったものを1つのパッケージとして出したほうがわかりやすいのではないかと思います。あと、地域の子どもたちですね。子どもたち自身が豊岡に関わっていくためにどうすればよいのかということも、もう行われているのかもしれませんが、中学や高校から実践型のプログラムとして授業の一環で行ったほうが豊岡に根付き

やすいのかなと。外から入ってくることも大事なんですけれども、やはり中にいる人の流出をいかに止めるかということも大事だと思いますし、高校を卒業して外の大学に行くというのが定番になっているんですが、帰ってくる割合がどうしても低いということもありますので、出て行く前に豊岡のまちのことを子どもたちに十分認識させて、いろいろなことを経験させておいたほうが良いのかなというふうに思います。

あと、外部からのUターン・Iターンについてなんですが、今、「飛んでるローカル豊岡」と「ジョブナビ豊岡」(TOYOOKA WORK STYLE)は、多分別々のサイトになっているんですね。あっちを見てこっちを見てということになっているんですけれども、実際に移住で探すときには住む場所だけでなく働く場所もついてきますので、そういうものを一本化したポータルサイトを作ったほうがよりわかりやすいのかなと思います。

それから、企業版ふるさと納税を豊岡市も受けていると思うんですが、ただ単に寄附を頂くだけではなくて、その寄附していただいた企業に豊岡市をいろいろな実証実験の場として使っていただくような、そういう業務提携みたいなことをしていただくと、またいろいろな分野で幅が広がっていくのかなと。何件かは多分されていると思うんですけれども、それをもっと拡大していくことによって、外部からの企業も入って来やすくなってやりやすい状態になっていくのかなと思います。

毎回この会議で何を答えるかというのは非常に難しいことなんですけれども、人口減少を食い止めなあかんということもあるんですが、今いる人にいかにこの豊岡を好きになってもらえるかというのが結構大事なことだと思うんです。中にいる人を外に出さないためにどうしていくか、どうすればわが子たちが帰ってくるかということを考えて政策も打たれると思うんですけれども、先ほどB委員がおっしゃったように非常に難しい話ばかりなので、みんなにわかりやすく伝わりやすくしたほうが市民の方々も受け入れやすいと思いますし、「わがまち豊岡」をどうにかしようという気持ちも伝わっていくのかなというふうに思います。

F 委員

先ほどD委員からご指摘があった、ホモソーシャルの概念が強く出ているのではないかということについて、私はジェンダーのことは職業上繊細な問題なのであまり今意見はしませんけれども、確かに何回か参加させていただいてる中で、女性目線というか、「いきいきと暮らす女性が増えている」とか、「女性が出産・子育てしやすい」というところがバンと出ているのは、多様性を尊重するという今の時代の価値観からすると少し違和感を持たれやすい記載なのかなというのは、私自身感じていました。女性に帰ってきてほしいというのはすごくわかるんですが、それが子どもを産んでほしいからとか、とにかく豊岡の人口減少を食い止めるために帰ってきてほしいんだというふうに思われると、確かに未婚や結婚しないという選択をされている方からすると、「子どもを産んで育てるのが女性の役割」というのを見せつけられるような内容になってしまっているというのは、ご指摘のとおりかなというふうに思いました。ただ、そうは言ってもこ

の会議の目的というのは人口減少対策で、人口減少にどう対応するかということが目的であるのはわかるんですけども、市民向けに指標として出すときに少し書き方を工夫したほうが受け入れられやすいのかなということは思いました。

人口減少が進んでいく中でこれからどういうふうにまちが生き残っていくかというところで、関係人口の話もそうなんです、やはり市に関わる人をどう増やしていくか、流出をどう止めるかというところは話し合っていないといけないと思いますので、その具体的ところで私の意見を述べさせていただきます。先ほどE委員からもありましたように、今いる子どもたちの流出をどうすれば食い止められるかというところで、私の子どもにもふと聞いてみたりしたんですけども、やはり子どもは目先の「都会に住みたい」とか「楽しいし便利だし」みたいなことを言うんですね。「でも、そうになったらこの市の人がどんどん減っていったって消滅するよ」ということを言うと、やはりそこにはあまり思い至っていないというか、子ども自身がそういう考え方をしたりそういう視点を持ったりしていないんですね。なので、先ほど座長が示されたようなグラフを実際に学校のふるさと教育の授業などで子どもたちにも見せて、こうなるよという未来をわかるように説明するとかですね。私も今日それを見てこんな状況なんだということに気付いたんですが、市民の方々も今の豊岡の状況というのを気付いているかどうかというのはちょっと疑問なので、広報に掲載するのか方法はまだわかりませんが、こうなっていくということを示す機会というのを設けてもいいのかなと思いました。

すでに出てしまっている人をどう戻すかということについては、やはり出てしまった人もそこでもう生活が始まってしまっていて、なかなか移住というのは難しいと思うんですね。なので、今いる子どもたちが将来帰ってきたいと思えるようなまちにするというところで考えると、将来大人になってから豊岡でどういう過ごし方があるのかというのがちょっとわかっていないのかなと思うところがあって、兵庫県は「トライやる・ウィーク」などで職業体験ができたりする取り組みもあると思うんですけども、やはりもう少し地元の企業とか、地元で働いて生活していくにはどういう職種があるのかとか、そういうのを知れる機会というのをつくってもいいのかなと。やはり地元で働く方がそこで働くことについて魅力を感じていないと子どもたちには伝わらないと思うので、そういう意味では既存の地元の企業を応援するというか、そこで働く方々一人ひとりの生活水準や幸福度が上がるような取り組みをもう少し充実させていくことが大切かなと思いました。

あと、関係人口の話でいうと、私の職業では、裁判所のIT化がかなり進んできていて、豊岡にいながら東京の裁判にも参加できるようになっていて、もう出張というのが不要になってきているんですね。そういう意味では、もうオンライン化というのが国の公務員のほうでは進んできていますので、働き方として、移住はしなくても豊岡の従業員として採用するということができないかなと。住民票を移していないと納税がどうかというのはあるかもしれませんが、そのようなIT化やオンライン化が進んできていることをうまく利用できないかなというふ

うには感じました。

G委員

難しいことを言おうと思っていたんですが、もう簡潔に申し上げようかなと思っていまして、というのも、先ほどB委員もおっしゃっていたように難しすぎると思うんですよ。要は「豊岡を好きになってくれればいいよ」ということかなと思います。

先ほど中嶋副座長が示された社会減のお話と非常に似ているような感じを、ここ数年私の会社でも受けていまして、要は日本人の就職率がなかなか厳しくなってきていると。皆さんご存じのとおり、技能実習制度は来年度の4月から育成就労制度へと移行するんですけれども、育成就労になると、テストを受けて合格すれば移動が自由になるという方向で、来年の4月以降は外国人の移動が非常に激しくなることが予想されます。やはり我々としてはいかに会社に残っていただけるかをずっと考えていまして、それが今の豊岡の問題ともちょっと似ているのかなというふうに感じています。もちろん、うちの会社がいいと思っていただけるように対応するというのが一番なんですけれども、日本の文化に非常に興味を持っているというのも事実で、やはり東京とか名古屋などに憧れていると言うんですね。ただ、行くのは休みの日の遊びだけでいいという子もいて、というのは、やはり実際にそこで生活していくとなると家賃などお金の面で厳しくなるし、そういうことを考えると豊岡に住んで働き続けるほうがメリットはあるというのを、転職で出て行った先輩から意見として聞いて、それでまだ興味を持って働いてくれている子も実際にいるんです。ですので、今の私の会社の対応としては、地元のお祭りにも参加してもらって日本の文化を体験させて、非常に楽しいと言っていますし、できたら日本人と結婚したいという子もいますので、ぜひそういう外国人もいるんだということを知っていただいて、豊岡に暮らす日本人と何か縁ができるような取組みや機会を持っていただくのもありかなと思います。外国人に対する意見がいろいろあるというのはわかっていますけれども、私は日本での父親のつもりで、良いことと悪いことの教育も含めてやっていますので、それも理解していただいて豊岡市にはいろいろな施策を考えていただけたらと思います。

それから今年、港地区でカッターレースという大きなイベントを行ったんですけれども、豊岡市の「城崎・港未来づくり補助金」に申請しまして、その内容を地元の中学生にプレゼンするという機会を頂きました。これは非常にありがたかったなと思っていまして、地元の中学生に地域の魅力や、大人たちがこのまちにどう思うかを持ってこのイベントをやろうとしているのかということを伝える良い機会だなと思ったので、張り切ってプレゼンさせていただきました。その審査員を務めた生徒のアンケートも見たのですが、これにまた非常に感動しまして、「この地区のためにこういうイベントをやろうとしている大人がいたことに驚いた」とか、「私たちのような若者が協力していかないといけないと思った」という意見もあったんですよ。ですので、今を生きる子どもたちにもリアルにこのまちの現状を伝えて、我々がなぜこういうことをやっているのかというと、豊岡が好きだからやっているんだということをもう少しはっきりと言えるような機会を

つくるというのも、大きなことを言えば豊岡市の地方創生に繋がっていくのではないかというふうに感じています。

座長 ありがとうございます。それでは、中嶋副座長から、これまでの委員の皆さんの提案や意見を踏まえて、補足があればお願いします。

副座長 まず、D委員からいろいろとご指摘がありましたが、私自身も比較的言いたいことを言うタイプですし、いろいろな分野の知見や経験を持った方が話し合っ、その意見を本市の戦略や施策・事業の中に生かしていくということなので、それはそれでいいんだと思います。ただ1つは、特に本市として女性や外国人に対して、先ほどおっしゃっていたようなホモソーシャル的な考え方とか価値観みたいなところを滲ませているとか、そういうことではないです。私は人口の専門家ですし、これは人口減少に対して行われている会議体であり戦略なわけですね。減っているのはなぜなのか、そしてその原因を突き止めて対策の方向性を考えてきたわけですが、やはり最終的には子どもが必要で、そのためには女性の存在が必要でとなると、どうやって女性にこのまちに残ってもらうのか。それ以上でもそれ以下でもないです。そのことによって何か女性たち一人ひとりが幸せでないと感じるようなことが、直接的にせよ間接的にせよ、施策の中に含まれているということはないと思います。私がこの会議体に関わり始めてから市長さんは3代目になるわけなんですけれども、むしろ豊岡市はそういった女性目線とかジェンダーなどを地方創生の中心に据えるということを、日本の中でも相当先進的にやり始めた自治体として全国的にも有名なんです。2代前の市長さんは、今、全国の自治体を飛び回りながらジェンダーと地方創生という講演を行っていたり、著書も書かれたりということをやっているらしいです。ただ、豊岡市だけに限らず、日本の地方の自治体というのは、そういった女性の目線とかジェンダーとかLGBTQといったことについて、かなりマイナスのところからスタートしていますので、現時点でD委員が見られたときに、「こんなものではまだまだ全然ダメじゃないか」と感じられるのはそうなんだと思います。ただ、相当後ろ側から走り始めていますので、まだまだ道半ばでたくさんの方が山積しているんだと思いますし、このまちの若い女性が増えないことには結婚と出産と人口というところの解決策にも繋がってきません。それは戦略の中で「量的緩和と質的転換」とか「攻めと守り」と言ってきたところの、“質”とか“守り”の部分でいかに女性にとっても外国人にとっても、一人ひとりにとって幸せだとかこのまちが好きだと感じてもらえるかというのが、今後のまちの人口規模であったり活力であったり、にぎわいといったところに繋がってくところで、究極的には目指されているところかと思っていますので、あまり言葉尻をとらえてそこを突き詰め過ぎないほうが、私はいいいのではないかと思います。いろいろな自治体を見ていただければ、むしろ豊岡市は頑張っていると思いますので、前向きに評価していただければと思って聞いていました。

それから、何名かの委員の方がおっしゃっていた、今いる人が出て行かないようにするにはとか、あるいはUターンの話ですね。これは専門家としてそうすべ

きだとか、そういう研究結果が出ているということではないんですけれども、第1期の頃に豊岡を巣立つ若者に向けてのポスターが市内に貼られていたのを記憶されていますかね。若い子たち向けに「飛び立て」というメッセージだったんですけれども、これを外に出て行かないようにということにしてしまうと、先ほどA委員がおっしゃっていたようなことに反する、求められるものがどんどん変わっていく社会とかビジネスみたいなところに通用しない人たちを囲っているようなまちになってしまう懸念があるんですね。まずはドーンと飛び立って、いろいろなまちでいろいろなことを経験してきて、その上で帰ってきて活躍してくれるということがなければ、今はA I とかりモートでいろいろできるとはいえですね、やはりリアルで人に会ってみるとか実際そこに行ってみるとか経験してみようということを否定すべきではないと思っています。

私の大学の学生に、徳島の地方創生の成功事例で有名なまちの出身の子がいますけれども、今は神戸の大学で学んでいます、いずれは地元に戻って市役所かどこかで働くつもりだと。でも、そのためにまずは徳島県が誘致している東京の会社のサテライトオフィスで働いてビジネスの最先端みたいなところを経験して、その後は徳島県庁に入って広域行政を学んで、その上で最終的に地元の市役所に入るんだと言うんですね。そういうふうにしないと、5000人とか6000人くらいの小さな自治体であっても、なかなか自分が最先端の働きや貢献ができるとは思わない、神戸で3、4年過ごしたくらいで学生の生活しか知らずに地元に戻るのもちょっと違うと思うと、そういうことを言っている子もいたりします。それから、今は新卒一括採用でそこから30年、40年勤め上げるなどというのは、なくなったとは言いませんが少数派になってきたと思いますし、優秀な人ほど20代で2つも3つも仕事を変えるような時代になってきました。ですので、新卒から5年とか7年くらい経験を積んだ上で、20代後半から30代前半くらいの家族形成のタイミングなどに、セカンドジョブやサードジョブで豊岡に戻ってきてもらうというような形が、本当は理想的なのではないかと私は思っているところです。

それから、市の中の方同士の交流のお話もありました。C委員からはキャリア的な側面でリーダーシップ育成の研修を一緒に受けてみてはどうかとありましたし、あるいは文化的なイベントみたいなものでもいいかもしれませんし、スポーツを一緒にやろうというようなものでもいいと思います。そういったことが結婚促進の事業のところにすごく重要な関連性を持っていると私は思っていて、実は第2期のときに結婚や出産促進に関連する事業をものすごく縮小したんです。最初は戦略体系として、社会減と自然減が対等に上で繋がっているみたいな立付けだったんですけれども、自然減のところがぐっと小さくなっていきました。唯一残ったのが結婚促進だったんですけれども、「結婚促進というのはこういうものだ」というのがある程度固まってしまってますね、当然、本人たちになぜ結婚しないのかと聞くんですけれども、別にしたくないわけではないんですけども、出会いがないからだと言うわけです。そうすると、おのずと対策としては出会いの機会をつくろうとなって、紹介・マッチングといった事業になってくるわけなん

ですね。ただ、それを真面目に正面からやろうとすればするほど、私としては実効性が下がると思っていて、行政がお膳立てしたような場に行って合コンしたりデートしたりするのって、何かちょっと盛り下がるといいますか、楽しくないですよ。なので、付き合う人が増えたり結婚が増えたり、その中から子どももできたらいいなとは思いますが、自主的にやっていることは若い人たちの交流事業だというふうになっているほうが、中身としても効果としても上がってくるのではないかなと思うんです。キャリア的な交流とかスポーツや文化の交流みたいなところがもう少し高まってきて、その中から偶発的に付き合いが始まって結婚して子どもも増えてくる、というくらいのほうが良いのではないかなと思います。かつては厚生労働省が、そういった行政が行う合コン事業みたいなことに対する補助金を持っていた時期もあったんですけども、全国的にほとんど効果が出ないのでやめるという事態になりましたし、この結婚促進の部分で今やっていらっしゃることを完全に否定するわけではないですけども、もう少しほかのものと関連付けたりとか、少しやり方や中身をシフトしたりしたほうが良いのではないかなと思って聞いていたところです

それから、委員の皆さんの意見をお聞きしたことと合わせて追加で提案といいますか、ちょっと私が気になっているのは、観光のDMOが城崎や竹野にあるんですけども、それぞれの地域の観光協会だけで完結したような形でやっていらっしゃるの、その連携ができないのかなと。もう少しこの観光DMOが、バックオフィスみたいな調整役とかインフラ役から、プランニングとか実施・運営といった役割になれないのかなと思います。例えば先ほどあったグローバルな観光の拠点をという話で、私は数年前に北海道にある星野リゾートに家族を連れて行って泊まったことがあるんですけども、スキーリゾートだったところを星野リゾートが全部買い取って、宿泊施設からレストラン、いろいろな体験ができる施設まで、もう山全体を星野が持っているんですね。そして各施設に、ここではこんなことが楽しめるというメニューがそろっていて、1週間くらい滞在しながら「今日はこれしょうか、明日はこれしょうか」といったことができるわけなんですけど、それを城崎でもできないかということです。城崎でおしゃれに浴衣を着てカランコロンと外湯めぐりするの結構ですし、旅館であろうとなかろうと食事していただいて地産地消というのも結構なんですけど、それで完結してしまうとリピーター化が難しいとか、他の観光資源が生かされないという部分があるんですね。なので、そこに行けばいろいろな紹介をしてくれて、神鍋や竹野のほうにも行ってみたいかどうか、永楽館もどうですかというようなメニューが全部そこに集約されていて、移動が難しいのであればトヨタモビリティ基金とかとやってきたようなオンデマンドの仕組みによって、あっちに行きたい人とこっちに行きたい人たちをまとめて効率よく運ぶような交通システムもあると思いますし、そういうことを誰かが企画・調整して、コンテンツ化やプログラム化していかないといけないと思うんですね。今のところ、現実的にはDMOあたりに置くのが良いのではないかなと思っていますので、例えばその人員や機能の拡充が可能な

いかというのが観光面でのお話です。

もう1つは教育のところで、F委員から兵庫県は「トライやる・ウィーク」があるとありましたが、あれはあくまでも中学生だけが対象ですよ。小中はどちらも市の教育委員会の所管ということもあって連携はやりやすいですし、いずれはほぼ義務教育学校になっていかざるをえないと思うんですが、中学校と高校の連携というのが、片や市の教育委員会で片や県の教育委員会、それから私立の近大附属みたいなところだと民間と教育委員会ということになりますので、ここの接続は問題があるのかなと思います。それから高大連携のところでは、専門職大学は兵庫県立ですのでお互い県の施設ではあるんですが、高校の教育を所管しているところと大学の教育を所管しているところは多分違うはずで、そうすると同じ兵庫県立だから高大連携できるだろうと思っていても、なかなかそこうまく接続しないとかいうことも出てくると思うんです。ただ、このまちの実態を良くも悪くも知っておいてもらわなければなりませんし、その中で「このまちが好き」ということもあるでしょうし、「大変だから何かやりたいわ」という気持ちもあると思うんですね。そういう気持ちが育っていくためには、やはり高校生や大学生の時期というのが重要になってくると私は思っていますので、高校生の探究学習みたいなところで高校と大学が連携していったほしいと思います。

それから、都会に行っている但馬出身の子たちが、春や夏の長期休暇で但馬に帰ってきてインターンするとか、あるいはワーキングホリデーみたいな形で働くことによって、先ほど申し上げたようなセカンドジョブやサードジョブで帰ってくるときに「生まれ育ったまちだけど何も知らんわ」ではなくて、ある程度まちの実態とかまちの問題、まちでの働き方や暮らし方についてイメージを持っている状態で、20代後半くらいで「豊岡も1つの選択肢かな」と言って帰ってきてくれるというくらいが現実的なのかなと思っています。話があちこち飛んでしまいましたが、私のリアクションとしてはそんなところですよ。

座長

予定の時間に到達してしまして、委員の皆さん同士の意見交換の時間も取りたかったんですけども、ちょっと時間の都合上できないということでご了承いただきたいと思います。

最後に私からまとめですけれども、今日は皆さんそれぞれの立場から、深い話にも触れていただいてご意見を頂きましたので、しっかりと受けとめたいと思っています。関係人口の話をしてみると、昨年、豊岡市も総務省のモデル事業に手を上げて、アプリを使って関係人口の繋がりを可視化して継続的な関係をつくるというプラットフォームに乗っかって進めようということで採択されました。兵庫県では唯一豊岡市だけですし、近畿でも2つしかありません。やはりこれまでから様々な取組みで関係人口に繋がる事業をすでにやってきたから採択されたというふうにも思っていますので、本日皆さんにご指摘いただいたようなこともすでに検討したり動かししたりしているということをご紹介させていただきました。またこの会議の中で、皆さんのご意見を踏まえてこのように考えていますということもご報告しながら、より成果のある戦略にしていきたいと思っています。そ

れでは予定の時間となりましたので、これにて終了させていただきたいと思います。

7 その他

8 閉会